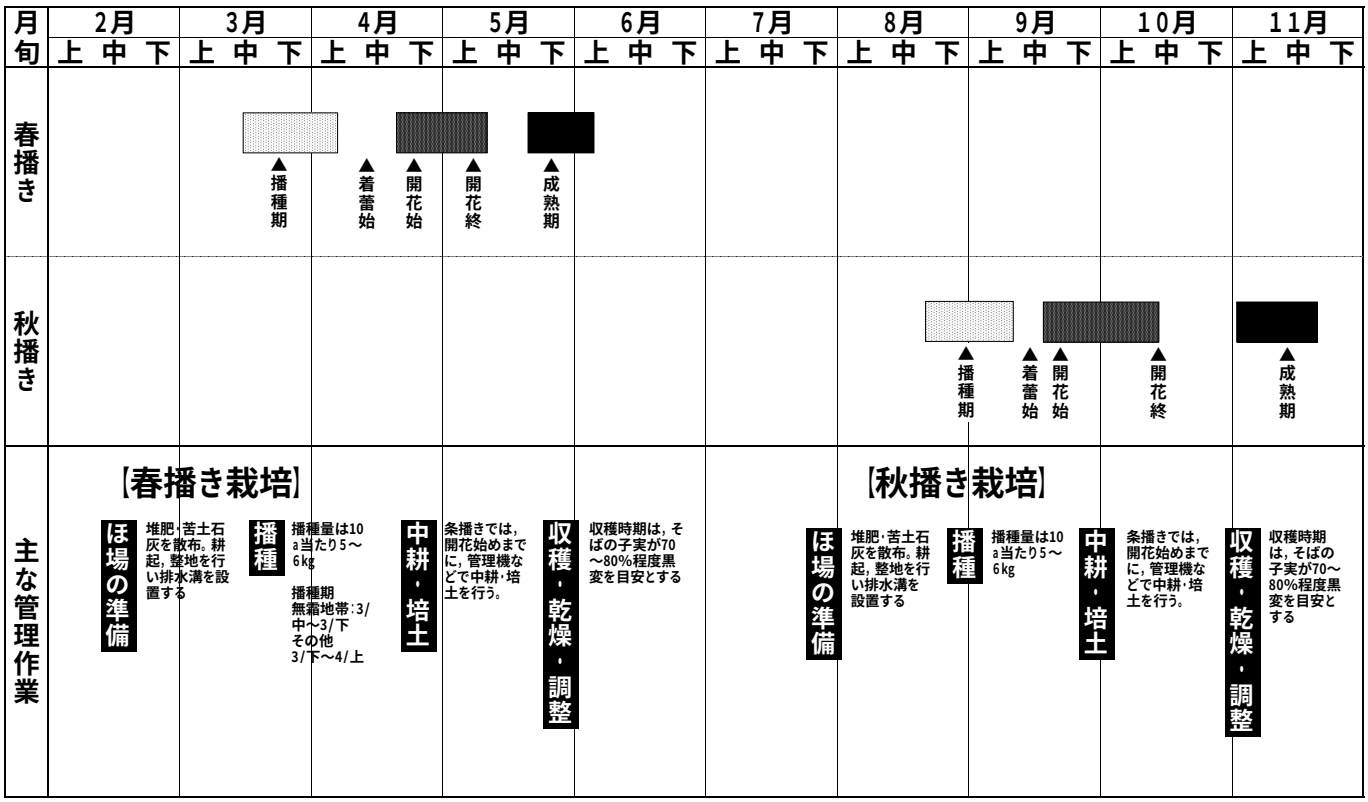
そば標準栽培暦

生産性の高いそばの作り方



■栽培のポイント

1　ほ場の準備（各作型共通）

(1)　そばは湿害に弱いため排水の良いほ場を選定し，排水対策を講じる。

(2)　耕起・砕土・整地

前作跡地は，耕起前に10アール当たり苦土石灰を60～100kg，堆肥を600kg施用して，入念に耕起し，砕土，整地を行う。水田転換1作目のほ場や野菜跡地等では過繁茂になりやすく，倒伏の恐れがあるため，堆肥の施用は控える。

(3)　排水対策

施肥，耕うん整地後，ほ場の周囲及びほ場内に深さ15～20cm程度の排水溝を5～10m間隔に設置する。ただし，排水不良田の場合は施肥，耕うん整地後の排水溝設置を併せて行う。

2　施肥

(1)　水田転換1年目，野菜跡地は窒素量を控えめにする。肥料は全面全層播き，条播きのいずれも全量基肥とする。

施肥量	基肥（kg/10a）	
成分名	春播き	秋播き
窒　素	2.0～3.0	1.0～2.0
りん酸	6.0～9.0	3.0～6.0
加　里	6.0～9.0	3.0～6.0

※配合肥料で施す場合は，上記の成分に近いものを使用する。

3　播種

(1)　品種

春播き：「春のいぶき」，「しなの夏そば」
秋播き：在来種（「鹿屋在来」等）
※春播き栽培に在来種を使用すると結実しないので注意する。

(2)　種子の準備

種子はとうみ等により，充実の良いものを選ぶ。

(3)　播種方法

播種方法は，全面全層播きと条播きの2つがある。

	全面全層播き	条　播　き
播種量	5～6kg／10a	
播種時期	春播き：晩霜を考慮して播種期を設定する 無霜地帯　3月中旬～3月下旬 県全域　3月下旬～4月上旬 秋播き：初霜の時期から概ね80日前を目安に播種期を設定する 一般的には8月下旬～9月上旬	
播種法	堆肥散布後，又は肥料散布と同時（ブロードキャスター使用時）に，ほ場全面にムラなく播種する。その後，軽くロータリーで深さ5～6cmに混和する。	施肥後，軽く間土した畦幅50～70cmの播き溝に条播して，2～3cm程度に覆土する。

4　管理作業（各作型共通）

条播きの場合は，播種後約1カ月（開花始め）までに，除草，倒伏軽減，及び排水対策等を兼ねて，小型管理機等で中耕培土を行う。

5　病害虫防除

病害虫は少ないが，特に生育期のヨトウガ，ハスモンヨトウの発生には注意する。そばは登録農薬が少ないため，農薬使用の際には，最寄りの農政関係機関に相談する。また，そばは虫媒花であり，開花期間中の農薬散布は，昆虫の密度や活動を低下させ結実不良を引き起こすので，できるだけ避ける。

6　収穫

収穫時期は，収穫方法によって異なるので注意する。

刈取り方法	収穫時期
手刈り	子実全体の70～80%が黒変した時で，早朝か夕方または曇天日で，やや湿度の高い時に収穫する。
ビーンハーベスタ等の刈取り機	手刈りよりやや早めの60～70%が黒変した時で，早朝か夕方または曇天日で，やや湿度の高い時に収穫する。
普通型コンバイン	［春播き栽培］ 子実全体の50～60%程度が黒変した時で，晴天日の日中に収穫する。 ［秋播き栽培］ 子実全体の80～90%程度が黒変した時で，晴天日の日中に収穫する。

7　脱穀・乾燥・調整（各作型共通）

(1)　脱穀

［春播き栽培］
春播き栽培では収穫期が梅雨期となるため，手刈りまたは刈り取り機で収穫後すみやかに屋内に搬送し，乾燥した後，スレッシャータイプの大豆脱粒機や，トラクターのタイヤ等で脱粒する。
［秋播き栽培］
手刈りまたは刈り取り機で収穫したそばは，ほ場で島立てを7～10日程度行って乾燥した後，スレッシャータイプの大豆脱粒機や，トラクターのタイヤ等で脱粒する。

(2)　乾燥

日乾または通風乾燥機等で，水分15%まで乾燥させる。なお，乾燥機を用いる場合，乾燥時の温度が30℃以上になると，そばの品質は著しく低下するので，なるべく低い温度（30℃以下）で徐々に乾燥させる。

(3)　調整

とうみ選等によって茎葉屑，未熟粒や土砂などを除去する。

そばの生産安定は，
まず，ほ場の排水対策の徹底から！
基本技術を励行し，単収向上を図ろう。